

# 新山協ニュース

▲ 発行者 平田大六

▲ 発行所 新潟県山岳協会

〒951 新潟市下旭町109

鈴木敏雄方

TEL 025-222-9548

## カムチャッカ

### トルバチェク峰報告

亀田山岳会

本 間 一 人

この話を聞いたのが協会の総会の頃でした。昨年の北極圏18日間の休暇に、今年も12日間の休暇は参加したい気持ちと、どうやって職場から許可してもらおうか、現役の勤め人にとっては大変なことでありました。結局、参加意欲表示をしたのは私が一番最後になりました。何はともあれ6月23日隊員13名で、友人の本田清氏に見送られてアエロフロートに乗り込み、何かの縁でロシア行き二回目となった私にとって機上は懐かしいものとなりました。

行ってみたいなと思ったのは昨年劇的な白鳥062Cと北極圏で再会したこと、そしてあわせて観察していたガンの標識鳥がカムチャッカにいくこと、邦人未踏峰のトルバチェクが魅力でした。アエロフロート機は1時間半程でロシア大陸上空に、そしてアムール川の大デルタ地帯が見えてきました。

着陸後入国手続きを終えてロビーで全員そろおうのを待っているとき、背の高い人が私の隣にいたので見上げて驚いた。昨年世話になったイゴリーさんではないか、イゴリーさんに話し掛けると、彼もびっくり、一年ぶりの再会を喜びあった。カムチャッカ上空では天候が悪く、全体の様子を見るのができなかったが無事着陸。そこい、突然警官のような制服を着た人が乗り込んで来て、パスポートの提出を求められた。日本人の我々だけのようだ。ロシアの国内便なのはどうなっているのだ。昨年はこのような扱いはいくつなかったのに。機から降りていくと、マイクロバスが待っていた。乗り込んで走りだすと、北海道の原野に似ている。笹、ダケカンパが続く。

我々はゲゼンホテル(間欠泉)に宿泊。ベースキャンプにむけ何度となくヘリに乗る準備をするが、現地の天候

## 新年会案内

日時 1996年1月28日(日)  
12時開宴  
会場 新潟市 イタリア軒  
会費 10,000円  
申込 〒951  
新潟市下旭町109  
鈴木敏雄方  
新潟県山岳協会  
ハガキにて申込願います。

## 理事会開催案内

新年会に先立ち同会場にて、理事会を開催します。  
役員、理事、委員各位は10時30分までに参集願います。

が悪く飛ばず、結局三日目にベースを目指す。初めて見るカムチャッカの原野は白樺のような樹と針葉樹、そして幾重もの三日月湖を抱え蛇行する河川、五十、百、二百年の年月を感じさせる三日月湖、その干し上がった湖に小さな集落を見つけた。

ヘリは山に近付いたのか雲の中に入り、視界が利かずしばらくホバーリングを続ける。やがて地上すれすれに飛び始め火山礫の上に着陸する。私はガスが濃く飛べないのかと思ったがどうやら火山を見せるために寄ったらしい。やがて離陸、火山を身ながら旋回山を下りはじめた。ガスの中から抜けだすと山小屋が見えてくる。最初予定したベース

キャンプは天候が悪いため着陸できず、下の小屋にしたのだという。ここから歩くのかと思ったら、案内人が下に車を取りに行ったという。やがて車の唸り声が聞こえて来ると軍用の六輪駆動車だ。火山礫の山を登るにはこれでなければだめらしい。荷物や燃料を積み込んで出発。ベースキャンプ目前でオーバーヒート。さしもの六輪駆動車も参ったらしい。ベースキャンプにはエルシャーさんが迎えてくれた。

小屋の周辺にはいろんな花ばなが私達を迎えてくれたが、なかでもリシリヒナゲシの群落はすごいはずである。  
6月28日8時起床。いよいよトルバチェクを目指すとき



がきた。記念写真を撮って出発。上部は曇り気温8度、歩きにくい礫の上をしばらく歩き休む。トルバチェクの下部爆烈火口を行くと太陽の日差しがあたり、もうもうと水蒸気が上がっている。見たことのない別世界だ。よく見ると火山灰の下には氷かけた雪があるというよりも、雪の上に風によって火山灰が積もったらしい。泥の中を行くと3m位の積雪があり、水はその下を音をたて流れている、天候はますます悪く雨である。ガイドがいるものの地図は無く、単調な山容のために目標となるものが少なくルートが分かりにくい。2160m地点に午後3時到着パンを食べる。雪が降り出した。

稜線上をいくと風はますます強まり周囲はなにも見えないが、足元の岩石は溶岩が固まり、あの島原の普賢岳の溶岩ドームを思わせる。2230m地点前進キャンプ、私は粗悪なテントではないかと心配していたのだが、日本製の6人用だ。我々は二張りに別れて休む。28日いよいよアタックの朝5時起床、マイナス2度雪降りだ。すでにニナサ

んとエルシャーさんが起きて朝食の支度をしている。全員そろっていただく。紅茶、クロパン、そして豚肉の油脂だ。1センチもの厚みで塩味、携帯食によく持ち歩いているようだ。ベースより50分位登りで馬蹄形状に開けたところに着いた。トルバチェク峰を左に見てぐるりと取り囲むように、右にトルバチェク火山である。右手のカル状の斜面には氷河が確認される。なかなか晴れてくれない頂上部を眺めながら、緩斜面を40〜50分程登り急斜面に取り付く。

### カムチャツカ讃歌 ①

## 緑豊かな明るい世界

日本山岳会会員

小 倉 厚

新潟県山岳協会では、日ロ友好親善のもとにロシア領事館の全面的支援を受けて、このほど(6月23日〜7月3日)カムチャツカ半島のトルバチェクに13人の登山隊を送った。(名誉総隊長・参議院議員 真島一男、登山隊長・新潟県山岳協会会長 室賀雄男)カムチャツカはあたたかも火山の巣である。最高峰はクリチーフスカヤ(4579m)

所どころ氷に雪が付きステップを切って登るのが、トップを行くワリヤーさんはすいすいと直登をしていく。だんだん風が強くなり時々対風姿勢を取る。地吹雪の上空は時々青空が開けカムチャツカの太陽がギラギラ照り付けていた。10時10分頂上に立つ。相変わらず風強く、爆烈火口に吹き飛ばされないように注意しながら、日ロ友好の記念写真を撮って下山。

出発に際し多くの方々からご支援を受け登頂できたことに感謝申し上げ報告とします。し、この「初」の魅力が厳しい登山の原動力になったに違いない。残念ながら私は生きる世代がやや遅かった。すべての峰々に人跡は至り、今や地球上のわずかに極地といわれる地域しかその可能性は残されていない。しかもその可能性を実現できるのは、特殊な優れた山のエリートにしか訪れる機会はない。「初登攀」、「初登頂」は、平成の今となっては平凡な登山者にとっては夢のまた夢になってしまった。そんななかで、もつべきものは岳友である。わが故郷(新潟県)の岳友らが、登山隊の一員にと声をかけてくれた。私にも高齢、そして家庭の事情があったが、この「日本人未踏峰」の魅力の前には勝てなかった。

であるが、半島には150と170ともいわれる火山が存在し、そのうち28座がいまなお煙を噴いている活火山である。入山の難しさもあって日本人未踏峰は、活火山を除いて10座ほどあるという。今回はその最高峰トルバチェク(3682m)が選ばれた。初登攀。登山者にとってなると魅力的なことだろう。幾多の先人たちが未踏の峰に對

そして新潟空港からまずはハバロフスクへ、ハバロフスクから半島の州都ペトロパブロフスクカムチャキーへと飛んだ。戦中、戦後の数年間、私は旧満州(現在の中国東北地区)で暮らした。この北の国では酷寒、凍土の印象が非常に強かった。しかし北緯50度から60度に広がるシベリア大陸の

東端に位置するカムチャツカ半島は、それよりさらに北にある。だから、永久凍土、ツンドラ、不毛の地を想像していたカムチャツカ。しかし、その予想に反して、6月下旬のカムチャツカは、タンポポやフーローの咲くのどかな美しい日本の早春だった。



ロシア連邦領事を囲んでの壮行会



毛どころか豊饒の世界ですらあった。ヘリの騒音のなかで、私は胸を驚くして脚下に広がる半島の風景に見入った。ヘリの進路はカムチャッカ半島の東側に連なるポストチ

## 平成7年度 高体連登山部

### 秋季大会 巻機山報告

新津高校 顧問 澤田 俊一

主管校 新津高校

期日 9月26日(火) 27日

会場 巻機山 尾根ルート

幕営 清水森林組合幕営場

参加校 40校

参加者 男子 236名

女子 66名

顧問 71名

合計 373名

9月26日(火) 曇り時々晴れ

14時40分 受付

15時10分 開会式

①高体連登山部長挨拶

②委員長挨拶

③全国総体出場報告

④諸連絡

16時 幕営・炊事

16時45分 顧問会議

20時30分 消灯

9月27日(水) 晴れ時々曇り

4時 起床

5時 幕営地発

ヌイ山脈と南端に起伏するオハラ山との鞍部を抜けて、半島最大の河川、カムチャッカ川に沿って大きく向きを変えて北上する。

(長岡新聞より転載)

12時 幕営地着・撤収

12時30分 閉会式

①登山部委員長講評

②諸連絡

12時50分 解散

今回はいくつか新しい試みがなされた。

① 尾根ルートとヌクビ沢ルートの2つのルートをオプションとして用意し、参加申し込みの段階で選択させた。

しかし、8月末の事前踏査で、ヌクビ沢の上部で技術的にかなり困難な部分があることが発見され、結局は尾根を往復することに決定した。

② 開会式での諸連絡は参加校のリーダーを通じ行った。

この時に行われた指示がうまく伝達されないパーティー

がいくつかあったのは残念であった。

③ 幕営は参加校の判断に任せ、細かな地割りはしなかった。心配した混乱は特に無かった。

④ 登山行動は各参加校単位で行われた。従来のいくつかのパーティーを組み合わせた班別の行動とはなかった。パーティーの数から見ると、この方法が望ましいと判断したからである。そして、この判断が正しいことが判明した。

反省と要望

① 大会要項をよく理解していないといふ考えられない参加校が見られた。例えば、参加申込み期限に数日遅れの参加申込みがいくつかあった。受け付け時の方法を所定通りにとらないパーティーがいくつかあった。顧問とリーダーのちよつとした気配りと注意があればすべて避けられる問題である。

② 参加した顧問の半数以上が無線機を持参してくれなかった。2人のコンローラーをお願いしてこの管制をしてもよかった。大会運営上、まことに有用で、有り難かった。

## 平成8年度 高体連登山部行事決まる

高体連登山部の平成8年度役員、行事予定が下記の通り決まりました。

※ 役員  
委員長 藤田善思(新潟)  
副委員長 近藤裕(新潟田農) 笛木勉(六日町)  
県山協担当 安野正弘(東工) 藤田善思(新潟)  
※ 行事

◎春季地区大会  
上越 三田原 5月8～9日  
中越 粟ヶ岳 5月9～10日  
下越 俣倉山 5月9～10日  
新潟 五頭山 5月9～10日

◎総体一次  
上越中越 菱ヶ岳 4月18～20日  
下越新潟 二王子岳 4月18～20日

◎総体 全県 守門岳 6月3～5日  
◎秋季大会 全県 火打山 9月25～26日

## 平成6年度指導員研修会報告

### 「登山中の事故遭難の時 リーダーの刑事民事責任は」(完)

弁護士 和田 光 弘

#### 2 自己過失

本人の技術が未熟であったとか、指導者の指示を無視したとか、用具装備が不完全だったとか、被害者自身の過失だったとか、その例として昭和61年9月26日府立高校夏山登山遭難事故があります。

#### 3 危険の同意

通常予測される危険は事前に同意しているから、社会的に容認される危険に伴う事故の法的責任は問えない。



力量によると思います。

法的にどこが問われるかという、例えば仲良しグループでリーダーを決めないで一番年上だからといって、お前やれと言って先輩がリーダーになることがあります。そのグループの中で経験豊かな人が居てリーダーにならず、登山中に死亡事故等が起きた場合、経験豊かなその人も責任を問われることがあります。

仲良しグループ登山の場合は、登山経験豊かな人は全て責任が問われる事もありますので、銘記しておかなければなりません。

個人山行と山岳会山行と2つありますが、会山行の時も責任が問われます。その注意事項として

①山行計画の合理性  
②事前準備、調査の徹底  
③天候に対する判断  
④パーティー員の技術、健康状態に対する判断  
⑤急激な状況変化時の避難の可能性

事例の中で木曾駒ヶ岳遭難事件昭和63年3月24日。判決平成2年2月3日。

都立工業専門学校の山岳部の活動として行われた、春山

登山中に発生した雪崩による死亡事故につき、引率指導者の過失が認められた事例で、最高裁迄いき、山の事故は場合によっては責任が問われる裁判所の考え方が確立したと言っていると思います。

遭難における法的責任の追及は社会的背景が問題で、遭

### わがクラブ ⑩

## 柿崎山岳会

西村道博

柿崎山岳会の発足は、昭和38年に初代会長の伊藤氏のご苦勞で発足致しました。

その後は、活動期・停滞期を繰り返して現在に至っている。この間の会員数は、延べ数で2000人を超えているが、現在の登録数は24人と少なく逆にまとまりのある会となっており。

当会もご多分に漏れず若い人の入会が皆無であり、会全体が年齢のみ底上げされている。それ由お互いの気心が知れ、山行中は暗黙のうちに夫れ夫れの役割決まり、リーダーの指示の前に行動を起こしている。

今年2月に、当会発足30周

難の数が多くなるとそれが社会の避難の声を受け、法的責任の追及が強く現れ、遭難事故が減少しない限り、法的責任の追及というようなことが、登山者社会を脅かす傾向にあるということだけでも、しっかり知っておくべきだと思います (文責 三富一弥)

年の記念行事を県山協というより友誼クラブ「さわがに」さんの小野氏を来賓に迎え執り行いました、同氏の記念講演が印象に残っているので紹介したい。

自然は自然であるのが最良であるが、自然を開発することと次ぎに何が起るかを考えその対策をしっかりとて置くこと、地域に密着した活動が会発展の原点である、と力説されていたことが印象に残っております。懇親会では、昔の山男、山女たちが、頭を白くさせた者やカラス足跡を深く刻んだ顔が、60名程集まり夜遅くまで大変なものでした。

さて、当会の特徴について紹介いたしますと、冒頭記しましたように会の新陳代謝がないため、年齢の底上げが続いているので低山の山行が中心となっている。

4月の総会時に計画担当から年間行事の発表があり、それを審議し決定されると同時に役割分担等がきまる。特徴の第一はホームグラウンドである米山の清掃であり、月一回実施していること、夏には一般募集登山、秋は行政と協賛で日帰りの軽登山を実施している。その他は四季に応じた計画となっております。

何故、米山清掃を毎月実施しているか？ 発足当時山頂周辺は「ゴミの山」であり、藪の中に穴を掘り埋めてきました。特に、柏崎側と柿崎側に林道が建設された5、6年間はひどいものでした。(小野氏の言葉を引用、林道ができた後に来た物はゴミであった)「ゴミの対応に苦慮した我々は、新聞に投書したり行政の広報にPRして参りました。最近はやっと皆さんに自慢できる「米山さん」になりました。もう一つの特徴は、12月の飯ごう納めの行事である。昔

は米山山頂で行っていたが、最近はその施設を借用しファミリー交流の飯ごう納めである。そのお陰で会と家庭が一体感のもてる会となっている。又「豊栄」さんのようにクラブコールはないが、当会にもアマ無線局の局長さんが大勢おり、山行時には連絡用に欠かせない物となっています。最後に、今後の方向性としては、地域の小さい山岳会として、会の年齢、会員の年齢を考慮しながら、派手な会ではなく思のながい活動を展開し楽しめる会として行きたい。

## 登山用品専門店

—— 信頼できるパートナー ——

## 大新スポーツ

新潟市東堀6 ☎(025)222-3736